めがねはどこだ

夫　クララ！　めがねが見つからないんだ。どこにあるか知らないかい？

妻　きのう台所にあるのを見ましたけど。

夫　きのうだって！　一時間前にはわしはまだそのめがねをかけて読んでたんだ。

妻　そうですか。でもきのうはそのめがね、台所にありましたわ。

夫　くだらんことを言うな。きのう、台所にあったってことが、何の役に立つ。

妻　あなたが今までにも二、三度、めがねを台所に忘れていたから、言ったまでですよ。

夫　二、三度だって！　もっとよく忘れておるよ。――今どこにあるのか、それを知りたいんだ。

妻　今どこにあるのかは私も知りませんけど、どこかにあるでしょう。

夫　どこかだって！　そりゃ、どこかにはあるさ。でもどこなんだ、どこかってどこなんだ？

妻　どこか？　私も知らないわ。それなら、どこか別の所でしょう。

夫　どこか別の所！　どこか別の所だって、どこかだぞ。

妻　あんまり馬鹿なことを言わないで下さいな。どこかとどこか別の所が、同時にどこか別の所であるはずがないでしょう。――まったく、毎日めがね探しなんだから。どこに置いたか次はちゃんと覚えてちょうだい。そうすれば、どこにあるかがわかるわ。

夫　でも、お前。そんなことは、めがねについて何も知らん者が言うことだ。どこに置いたか知っていたって、だめなんだ。どこにあるのか見えないんだから。めがねなしではものが見えんのだから。

妻　たいした問題じゃありません。それなら、もう一つめがねがあればいいのよ。それをかければ、もう一つのめがねを探せるわ。

夫　ふん。そいつは高くつくぞ。年に千度もわしはめがねを置き忘れるんだ。その度にめがねが要ったら、一番安いめがねだって三マルクはする、だから年に三千マルクもめがねにかかっちまう。

妻　馬鹿ね。千個もめがねを要らないでしょう。

夫　でも二つは絶対に要るぞ。近く用と遠く用と。――いやだめだ、それじゃお話にならない。考えてもみてくれ、遠く用のを置き忘れて、近く用のだけ手元にあったとする。そして遠く用のがずっと遠くにあるとすると、わしはその遠くにある遠く用のを近く用のめがねでは見つけられないものな。

妻　そういう時は、近く用のをかけて、遠く用のがあるところの近くまで行けば、近く用ので遠く用のありかが見えるわ。

夫　でも、どこに遠く用のがあるのか、わしは知らんのだ。

妻　あなたがめがねを置いた場所がそうじゃないの。

夫　それはそうなんだ。だが、その場所を覚えとらんのだ。

妻　どういうことなんですか。ひょっとしてあなた、めがねをケースの中に入れたんじゃないですか？

夫　そうだ！　そうかもしれん。あの中に入ってるんだ。ケースをとっておくれ。

妻　ケースはどこですか？

夫　ケースは、めがねが入っているところだ。

妻　ふだんはめがねはケースに入ってませんよ。

夫　いいや、いつもケースに入っとる。わしがかけているとき以外は。

妻　何を？　ケースですか？

夫　いや、めがねだ。

妻　あれま！　私、どこを見てたんでしょう。――あなた、ご自分のおでこの上を見てご覧なさい。

夫　そんなとこ、見えんよ。

妻　それじゃ、手をやってご覧なさい。あなた、おでこの上にめがねを押し上げてたのね。

夫　あー、本当だ。わしのめがねだ。でも残念だ。

妻　何が残念なんです？

夫　ケースがついてない。